

福島県内における板鍔付鉄刀の流通 —八幡横穴墓群、郭内横穴墓群、跡見塚古墳出土例を起点に—

和田 伸哉

1 はじめに

福島県文化財センター白河館（まほろん）の常設展示室には、復元製作された古墳時代の鉄刀の付属具である鉄製の鍔（板鍔）が展示されている（写真1）。板鍔は、刀に装着することで手を防御し、戦闘時、特に近接戦においてその効果を発揮する実用的な防具である（註1）。後に発展を遂げる日本刀においては、刀身の発展とともに精緻な技術による華麗な装飾をもつものが造られ、それだけで芸術作品として価値のあるものも少なくない。我が国における板鍔の出現は古墳時代に遡り、主に古墳または横穴墓の被葬者の副葬品として出土する鉄刀に付属して出土する。

写真1－1は、いわき市平下高久に所在する八幡横穴墓群内出土の板鍔で、長径7.5cm・短径5.9cm・最大厚10.4mmで、透孔はもたない（以下、無窓鍔と呼称）。写真1－2は、白河市郭内に所在する郭内横穴墓群内から出土した板鍔で、長径7.5cm・短径6.4cm・最大厚5.8mmで、六口の方形の透孔（以下、六窓鍔と呼称）をもつ。写真1－3は、須賀川市柱田に所在する跡見塚古墳出土の板鍔で、長径8.5cm・短径6.6cm・最大厚50mmで八口の方形の透孔（以下、八窓鍔と呼称）をもつ。これらの復元の経緯や工程については、当館『研究紀要2003』に詳しくまとめられているので、そちらを参照していただきたい（註2）。



1 無窓鍔（いわき市八幡横穴墓） 2 六窓鍔（白河市郭内横穴墓） 3 八窓鍔（須賀川市跡見塚古墳）

写真1 まほろん所蔵の鉄製板鍔（復元品）

上記3遺跡出土の鍔にはそれぞれ、平面もしくは側縁部に、溝を彫って金糸もしくは銀糸を嵌め込んで文様を作り出す技法である、象嵌が施されている。鍔を含む象嵌刀装具は、当時畿内にあったとされる政権（以下、畿内政権と呼称）下で製作され、各地に配布されたという見方が大勢を占めている（註3）。本県内の象嵌刀装具については、松田隆嗣氏（註4）、森幸彦氏（註5）によって集成・研究されている。森氏は県内出土の象嵌資料を、西山要一氏、滝瀬芳之氏、野中仁氏が示した象嵌文様の型式変遷を基に分類、平面部と側縁部の文様が共通することが本県内出土象嵌鍔の特徴であるとし、分布状況から流通の起点をいわき市域とした。また、流通した年代に関しても、古墳時代後期にあたる6世紀後半から7世紀中葉としている。

このように、板鍔を含む象嵌刀装具を備える鉄刀の分布は、畿内政権の本県域における影響

力の拡大過程の一側面を示す可能性をもっている。

一方、これら象嵌資料とともに出土する象嵌をもたない刀装具に関する研究は、鉄刀の編年の手がかりとして研究が進められ、板鍔の出現は6世紀前半、普及は6世紀後半とされている（註6）。また、板鍔自体の編年研究も進められ、八窓よりも六窓がやや新しい要素であること、時代が下るにつれ外形が縦長になること、窓が小型化し配列に乱れが生じることが指摘されている（註7）。生産と流通についても、形態の規格性、窓の配置や形の差異に基づいた分析が進められている（註8）。豊島直博氏は、八窓鍔と六窓鍔がその過半数を占めることから、これらを「定形透鍔」とし、畿内政権によって各地に配布されたと指摘し、同時に、八窓鍔、六窓鍔以外の型式の板鍔を「特殊鍔」として在地での生産を想定している（註9）。

これらの先行研究を受け、小稿では、古墳時代後期に盛行する板鍔付鉄刀、なかでも実用の付属具である鉄製板鍔の平面形態、特に透孔（窓）の数と有無に主眼を置き、本県内における分布状況から、その流通（註10）について考えてみたい。

2 福島県内における板鍔の類例と分布

本県内から出土する板鍔の種類には、方形の窓が八口の八窓鍔・七口の七窓鍔・六口の六窓鍔、円形の窓が二口の二円窓鍔・十口の十円窓鍔、窓をもたない無窓鍔がみられる（図1）。

今回集成した板鍔の総数は86例以上（金銅製板鍔は除く。以下同じ）、八窓鍔17例以上、七窓鍔2例、六窓鍔5例、二円窓鍔4例、十円窓鍔1例、無窓鍔50例以上、窓数は不明であるが、窓を有する鍔7例となっている。現状では、本県内においては、窓をもたない無窓鍔が総数の半分以上を占めている。次に、型式ごとにその分布状況を見てみたい。

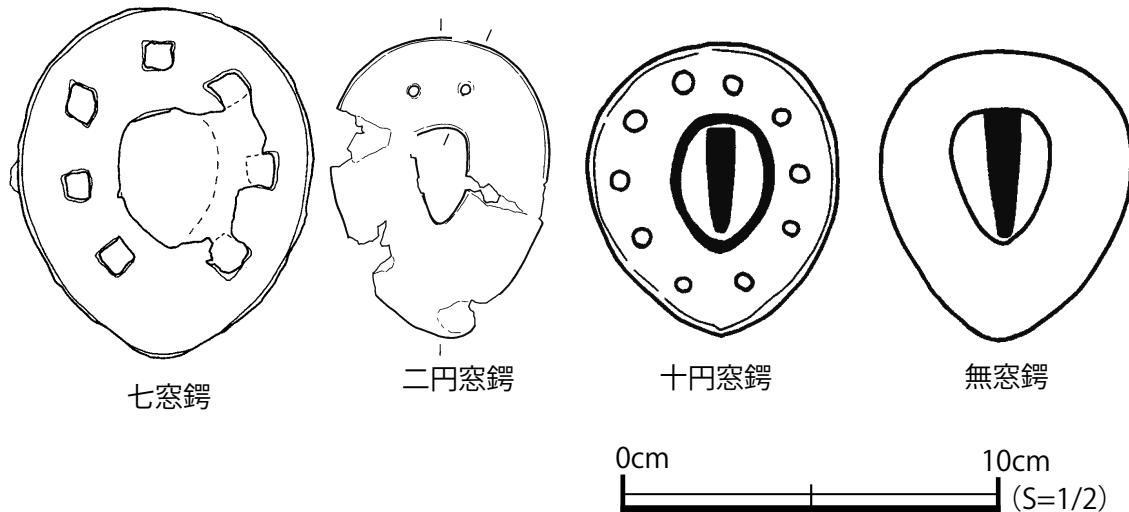


図1 福島県内出土の特殊鍔

八窓鍔の分布

古墳または横穴墓から17例以上出土している。内訳は、いわき市内から11例以上（八幡横穴墓群8例以上、川子田4号横穴墓1例、小申田北20号横穴墓1例、白穴南4号横穴墓1例）、鮫川村鍬木田古墳から1例、白河市観音山横穴墓群から2例（うち1例は2号横穴墓出土）、

須賀川市跡見塚古墳から1例、福島市月の輪山1号墳から1例となっている。

分布の中心は、いわき市域にあり、中でも夏井川の南を流れる滑津川下流域に顕著な偏りがみられる。また、八幡横穴墓群内から八窓もしくはその可能性のある象嵌鍔が6例以上出土していることは注目される。

六窓鍔の分布

古墳または横穴墓から5例出土している。内訳は、白河市内から4例（郭内横穴墓群2例、観音山横穴墓2例）、須賀川市下小山田2号墳から1例となっており、白河市域に偏りがみられる。また、郭内横穴からは六窓の象嵌鍔が出土している。

七窓鍔・二円窓鍔・十円窓鍔の分布

古墳または横穴墓から七窓鍔は2例（いわき市白穴東2号横穴墓1例・白穴南5号横穴墓1例）、二円窓鍔は4例（いわき市小申田8号横穴墓1例、白河市観音山横穴墓1例、矢吹町弘法山1号横穴墓2例）、十円窓鍔は1例（矢吹市弘法山1号横穴墓）となっている。

無窓鍔の分布

古墳または横穴墓から50例以上出土しており、いわき市15例以上、白河市9例・泉崎村2例・矢吹町10例・中島村1例・石川町2例と、50例以上中24例が県南の阿武隈川沿いに集中する。

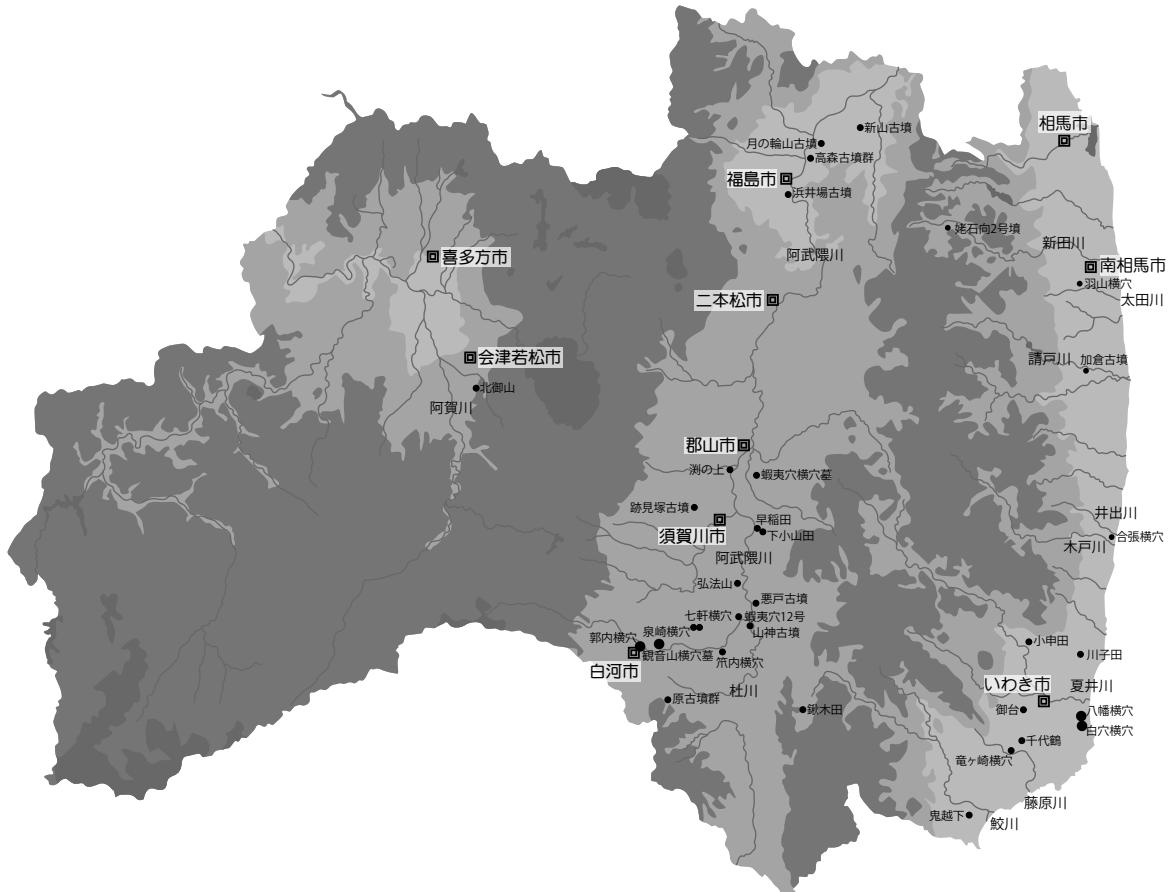


図2 福島県内の板鍔付鉄刀出土古墳・横穴墓

3 福島県内における板鍔付鉄刀の流通

上記のような分布状況を基に福島県内における板鍔付鉄刀の流通について考えてみたい。板鍔を含めた象嵌刀装具について検討した森氏は、象嵌刀装具を備えた鉄刀が最初にもたらされたのは、いわき地域であり、次いで阿武隈川流域、さらに阿武隈山系や阿武隈川辺縁地域に広がっていく様子を指摘し、本県内における畿内政権の影響力の拡大過程を読み取った（註11）。

今回検討した板鍔付鉄刀においてはどうだろうか。八窓鍔が六窓鍔より古いという見解に従えば、八窓鍔がいわき地域に集中し、明確な六窓鍔が出土していない状況は、当時の畿内政権の影響力が、本県内で一番早く到達した場所が「いわき」であり、そこを起点として西方の阿武隈川沿いへと影響力を拡大していったという解釈は可能である。

一方で、いわき地域と白河地域における八窓鍔と六窓鍔の分布状況に明確な違いがみられるることは注目される。かつて筆者が千葉県内の八窓鍔と六窓鍔の分布を検討した際、本県内のような両者の明確な分布状況の違いは認められず、地域的偏りは見られなかった。千葉県内においては、村田川下流域の被葬者集団によってそれらは掌握され、そこを起点に北東方向へ拡大していった可能性が高い。言い換えれば、これは、拠点となる地域への配布ルートが1つであった可能性を示している（註12）。

表1 福島県内板鍔付鉄刀出土古墳・横穴墓

市町村	No.	古墳・横穴(墓)名	壇形・規模(m)	出土数	窟数	材質	象嵌	文献
いわき市	1	鬼越下東6号	横穴墓	1	無	鉄		(1)
	2	八幡2号	横穴墓	1	8	鉄	銀	(2)
				1	無	鉄	銀	
		八幡4号	横穴墓	3以上	有	鉄	銀	
		八幡12号	横穴墓	1	8	鉄		
		八幡23号	横穴墓	2	8	鉄	銀	
				4以上	8	鉄		
				4以上	無	鉄		
	3	川子田3号	横穴墓	1	無	鉄		
		川子田4号	横穴墓	1	(8)	鉄	銀	
				1	無	鉄		
4	小申田10号	横穴墓	1	無	鉄			(4)
	小申田8号	横穴墓	1	無	鉄			
				1	2円	鉄		
	小申田20号	横穴墓	1	8	鉄			
5	御台A18号	横穴墓	1	無	鉄			(5)
	白穴東2号	横穴墓	1	7	鉄			
6	白穴東3号	横穴墓	1	無	鉄			(6)
	白穴南4号	横穴墓	1	(8)	鉄	○		
	白穴南5号	横穴墓	1	7	鉄			
			1	有	鉄			
	白穴南6号	横穴墓	1	無	鉄			
	千代鶴11号	横穴墓	1	無	鉄			
	童ヶ崎2号	横穴墓	1	無	鉄			
	童ヶ崎6号	横穴墓	1	無	鉄			
	9	鎌木田古墳	不明・不明	1	8	鉄	○	(9)
	10	郭内横穴	横穴墓	1	6	鉄	銀	
白河市	郭内4号	横穴墓	1	6	鉄			(10)
	郭内7号	横穴墓	1	6	金銅			
			1	無	鉄			
	観音山	横穴墓	1	8	鉄			
			1	6	鉄			
			2	無	鉄			
			1	2円	鉄			
	観音山2号	横穴墓	2	8	鉄			
	観音山9号	横穴墓	1	6	鉄			
			1	無	鉄			
12	笊内6号	横穴墓	1	無	鉄			(12)
	原2号墳	不明・不明	1	無	金銅			
			1	無	鉄			
		原3号墳	不明・不明	2	無	鉄		
泉崎村	14	泉崎横穴	横穴墓	2	無	鉄		(14)
	15	弘法山1号	横穴墓	2	無	鉄		
			2	2円	鉄			
			1	10円	鉄			
	弘法山6号	横穴墓	3	無	鉄			
	弘法山8号	横穴墓	3	無	鉄			
	16	七軒1号	横穴墓	2	無	鉄		
	17	蝦夷穴12号	横穴墓	1	無	鉄		
	18	山神1号墳	円・13	1	無	鉄		
	19	悪戸1号墳	円・20	1	(無)	鉄		
須賀川市	20	早稲田15号墳	円・11	1	6or8	鉄		(20)
	21	下小山田2号墳	円・12	1	6	鉄		
	22	跡見塚古墳群	円・不	1	8	鉄	○	
郡山市	23	蝦夷穴13号	横穴墓	1	無	鉄	○	(23)
			1	(無)	鉄			
	24	瀬の上1号	円・20	1	6	金銅		
	25	月ノ輪山1号	円・19.8	2	6	金銅		
福島市			1	(8)	鉄			
	26	高森古墳群	円	1	有	鉄	銀	(26)
伊達市	27	浜井塙1号	前方後円・22.5	4	無	鉄		
	28	新山1号墳	円・8	1	(無)	鉄		
		新山2号墳	円・10.5	1	(無)	鉄		
飯館村	29	姥石向2号墳	円・10	2	無	鉄		(29)
	30	羽山1号	横穴墓	1	無	鉄		
	31	加倉1号墳	円・10	2	無	鉄		
楢葉町	32	合張横穴11号	横穴墓	1	(無)	鉄		(32)
	33	北御山	不明	1	無	鉄	○	

非常に短絡的ではあるが、本県域におけるこの分布状況の違いは、配布ルートの違いを反映した可能性が高いのではないかと考えている。時代は下るが、律令期における本県域の交通路について考察を行った荒木隆氏によれば、現在の茨城県域からいわき市域へ至り、太平洋沿いを北上する「東海道」が養老3（719）年には整備され、同じく栃木県域から白河市域へ至り阿武隈川沿いに北上する「東山道」も整備されており、これらの存在を示唆する遺跡（遺構）が発見されている。同時に、それらを東西に繋ぐ「伝路」の存在も想定され、白河市（白河郡）といわき市（磐城郡）を繋ぐルートも存在したとする（註13）。いわき市域と白河市域が密に関係していたということは、同時期に存在した彩色壁画古墳（いわき市中田横穴群と泉崎村泉崎横穴群）の存在からも伺えるが、このルートが古墳時代後段階で確立していたかどうかは判然としない。現状では、両地域を繋いでいたのは、あくまで「伝路」という連絡路で、本道ではなかった可能性が高い。

従って、八窓鍔と六窓鍔の時期差を考慮するならば、この分布の違いは、いわき市域へは後の東海道のルート、白河市域へは後の東山道となるルートを使用してもたらされたものであり、白河市域への到達が、いわき市域よりやや遅れたと見るという解釈も可能なではないだろうか。横須賀倫達氏は、同時期に鍔付鉄刀より上位の威信財として流通した装飾付鉄刀が出土した渕の上古墳（郡山市）出土の冑を検討した際に、現在の群馬県・栃木県を通ったとされる「古東山道」を介してもたらされたと指摘している（註14）。

最後に、在地生産が想定されている無窓鍔の分布について考えたい。今回集成を行った鉄製板鍔86例以上中、無窓鍔は50例以上出土し、多い順に、いわき市（14例以上）、矢吹町（10例）、白河市（9例）となっている。いわき市域と県南の阿武隈川流域に集中し、本県内において、同地域に流通拠点があったことは明確である。いわき市域では、八幡横穴群・白穴横穴群（7例以上）の滑津川流域を拠点とし、川子田横穴群（2例）、合張横穴11号（1例）・加倉1号墳（2例）・羽山1号横穴（1例）と北上する。また、県南地域における流通拠点は、出土数においては、矢吹町弘法山横穴群から8例と白河市内からの出土を上回るが、郭内横穴群（1例）・観音山横穴群（3例）からは有窓鍔が7例出土しているのに対し、弘法山横穴群では出土していない状況を考慮すれば、流通の拠点は白河市域にあったと考えられる。

いずれにせよ、本県域における板鍔付鉄刀は、いわき市域、なかでも八幡横穴群・白穴横穴群の被葬者集団と白河市域、なかでも郭内横穴・観音山横穴の被葬者集団によって掌握され、この2つの地域を拠点として、ともに北へ拡大していった可能性が指摘できる。

4 まとめと今後の課題

今回の検討では、福島県内における板鍔付鉄刀の分布状況に主眼を置き、本県内における流通について考えた。その結果、現状では、本県内における板鍔の種類は、八窓、六窓、七窓、十円窓、二円窓、無窓の6型式が確認され、なかでも無窓鍔が過半数以上を占めることが確認できた。また、八窓鍔、六窓鍔、無窓鍔の分布には、明確な偏りがあることが確認され、その流通拠点が、いわき市域と白河市域にあったことが想定できた。

しかし、より確かな本県内における流通ルートを導き出すには、遺物同士の詳細な比較検討が必要であることは言うまでもなく、本県域に至るルートに関しても、隣接する他地域の集成が不可欠である。今後検討すべきことは、山積しているが、森氏も指摘するように分布に地域的特性を映し出すことができれば、畿内政権の単一的支配ではなく、畿内有力豪族の地方支配過程と推移を読み取れる可能性があることは示せたのではないかと考える。

<註>

- (註 1) 福島雅儀 1991 「鉄製板鍔付鉄刀の成立」『蝦夷穴 12 号横穴墓調査報告書第 2 集』福島県西白河郡中島村教育委員会
- (註 2) 復元研究プロジェクトチーム 2004 「福島県内出土古墳時代象嵌資料の研究復元製作」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2003』財団法人福島県文化振興事業団・福島県文化財センター白河館（まほろん）
- (註 3) 西山要一 1986 「古墳時代の象嵌一刀装具について—」『考古学雑誌』第 72 卷第 1 号 日本考古学会
橋本博文 1993 「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会
滝瀬芳之・野中仁 1996 「埼玉県内出土象嵌遺物の研究—埼玉県の象嵌装大刀—」『研究紀要』第 12 号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
豊島直博 2001 「古墳時代後期における直刀の生産と流通—近畿地方を中心に—」『考古学研究』第 48 卷第 2 号 考古学研究会
豊島直博 2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』 塙書房
- (註 4) 松田隆嗣 1992 『出土鉄製品の構造技法調査』 福島県立博物館
- (註 5) 森幸彦 2004 「[4] 福島県内出土の象嵌資料」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2003』財団法人福島県文化振興事業団・福島県文化財センター白河館（まほろん）
- (註 6) 白杵勲 1984 「鋸本穴をもつ鉄刀について」『考古学研究』第 31 卷第 2 号 考古学研究会
前掲（註 1）福島論文
菊池芳朗 1993 「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第 7 号 福島県立博物館
- (註 7) 前掲（註 6）白杵論文
新納泉 1983 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第 30 卷第 3 号 考古学研究会
- (註 8) 折原洋一 1997 「房縁地域における有窓（孔）鍔について」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』 同成社
西澤正晴 2002 「遠江・駿河における鉄製板鍔の変遷と展開」『研究紀要』第 9 号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- (註 9) 前掲（註 3）豊島論文 2001・2010
- (註 10) 「流通」とは、ある商品およびサービスが、生産者から最終消費者へ渡るまでを取り結ぶ輸送・保管・取引などの一連の活動を表す用語であるが、ここでは、畿内政権が各地域における影響力の拡大を

図るために鍔付鉄刀を各地の有力者に配布した活動、及びその地域内での広がりを指すこととする。

(註 11) 前掲(註 5)森論文

(註 12) 和田伸哉 2009 「房総地域における古墳時代後期から終末期の直刀の流通」『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古第 25・26 合併号 青山考古学会

(註 13) 荒木 隆 2014 「陸奥南部における古代交通路—郡家と官道・川・海の利用」『福島県立博物館紀要』第 28 号 福島県立博物館

(註 14) 横須賀倫達 2009 「湧の上 1・2 号墳出土遺物の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第 23 号 福島県立博物館

(表中参考文献)

- (1) 財団法人いわき市教育文化事業団 2013 『鬼越下横穴群・一町田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 141 冊 いわき市教育委員会
- (2) 財団法人いわき市教育文化事業団 2011 『八幡横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 148 冊 いわき市教育委員会
- (3) 財団法人いわき市教育文化事業団 2000 『下川子田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 66 冊 いわき市教育委員会
- (4) 財団法人いわき市教育文化事業団 1988 『小申田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 20 冊 いわき市教育委員会
- (5) 財団法人いわき市教育文化事業団 1989 『御台横穴 A 群・御台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 25 冊 いわき市教育委員会
- (6) 財団法人いわき市教育文化事業団 2010 『神谷作 106 号墳・白穴横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 141 冊 いわき市教育委員会
- (7) 財団法人いわき市教育文化事業団 1993 『千代鶴横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 32 冊 いわき市教育委員会
- (8) 財団法人いわき市教育文化事業団 2014 『山田作横穴群・大室横穴群・馬場横穴群・竜ヶ崎横穴群・堰下横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 162 冊 いわき市教育委員会
- (9) 鮫川村史編纂委員会 1996 『鮫川村史第 2 卷資料編(上)』 鮫川村
- (10) 寺島文隆・根本信孝 1981 『郭内横穴墓群』白河市埋蔵文化財調査報告書第 4 集 白河市教育委員会
- (11) 白河市教育委員会 2005 『観音山横穴墓群発掘調査報告書』白河市埋蔵文化財調査報告書第 42 集
- (12) 財団法人福島県文化センター 1979 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第 74 集 福島県教育委員会
- (13) 表郷村教育委員会 1998 『原古墳群』
- (14) 福島雅儀 1983 『七軒横穴墓』福島県西白河郡矢吹町刊行会
- (15) 財団法人福島県文化センター 2000 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書 8—弘法山古墳群一』福島県文化財調査報告書第 369 集 福島県教育委員会

- (16) 前掲 (13) と同じ。
- (17) 高橋信一・日下部善己・福島雅儀 1991 『蝦夷穴 12 号横穴墓調査報告』中島村文化財調査報告書第 2 集 福島県西白河郡中島村教育委員会
- (18) 福島県石川町町史編纂委員会 2006 『石川町史 第三巻 資料編 1 考古・古代・中世 [考古]』福島県石川町
- (19) 前掲 (17) と同じ。
- (20) 財団法人福島県文化センター 1979 『母畑地区遺跡発掘調査報告IV』福島県文化財調査報告書第 84 集 福島県教育委員会
- (21) 前掲 (19) と同じ。
- (22) 江藤吉雄 2000 「岩瀬の古墳時代」『図説須賀川・石川・岩瀬の歴史』郷土出版社
- (23) 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 2002 『蝦夷穴横穴墓群』福島県郡山市教育委員会
- (24) 横須賀倫達 2009 「渕の上 1・2 号墳出土遺物の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第 23 号 福島県立博物館
- (25) 福島市教育委員会 1989 『月ノ輪山 1 号墳一月ノ輪山 1 号墳発掘調査報告一』福島市埋蔵文化財報告書第 32 集
- (26) 松田隆嗣 1992 『出土鉄製品の構造技法調査』福島県立博物館
- (27) 財団法人福島市振興公社 2003 『浜井場古墳群』福島市埋蔵文化財報告書第 164 集 福島市教育委員会
- (28) 梁川町教育委員会 1974 『新山古墳群』梁川町文化財調査報告書第 1 集
- (29) 福島県相馬郡飯舘村教育委員会 1974 『姥石向 2 号墳発掘調査概報』福島県相馬郡飯舘村
- (30) 南相馬市教育委員会博物館市史編纂係 2011 『原町市史』第三巻 資料編 I 「考古」南相馬市
- (31) 生江芳徳・寺島文隆 1979 『加倉古墳群』浪江町教育委員会
- (32) 榎葉町教育委員会 2005 『合張横穴群調査報告』双葉町文化財調査報告書第 14 号
- (33) 前掲 (25) と同じ。

【挿図出展】

- ・図 1 … 1 (表註 6) ・ (表註 14) 文献より転載、一部改変。
- ・図 2 … 筆者作成。

【写真出展】

- ・写真…福島県文化財センター所蔵、一部改変。